

羣書類從

五百三上

庫文閣内	
二一五函	二六八和
内閣文庫	
番號	和 18690
册數	666(633)
函號	215 3



群書類従巻第五百二上

雜部 五十八

箱 披 保 色 一 集



Handwritten text in cursive style, including the date '天正十一年' (Tenmei 11, 1622).

群書類従

群書類従

羣書類従巻第五百三上

浅草文庫

雑部五百八

檢校保巳一集



十一番歌合

地をさかす時々のわとびくさすはるるよ
道とまほことふはもそそりけのなとと
まのりことた歌をよまそそ名つあてあつらふの
ふとわさねのけい目な社のもろあまかよひんか
ら歌をやつけし神くまふたえことねふまに
りなるうのた歌あまけりろふも心をたか魚を

留あふれうたむどかしのりそをのく左右とよ
かりそ哥と合ゆくの題を月と云て成出さ
元穢もく判あふるれ魚しと無あのみ
歌しや

題

月 恋

一番左

なふとんそいあすみゆゆあけすひののいよ
右

軒あきそ古記うらわの古良想うのほきをまな月見
友の歌とけすむ月いそくはしきもゆれと
まゝい合あてかいあく月あやかしくいこ
右歌ういまははらぬのほくあつと
ま月をほめいし海と歌と中へくれと書
かたをまきあははらうとくおわや一絶
えれとん独あまれあうらうとんはてしのめはつひ
うあめや人のられはらぬのほくあつと
まあつとんてをのめひつとあつとあつと
ほくの哥とゆた歌へしとねとす

番匠

我々もけさ

お園寺へ

又めしきい

嘗て地

うり

らん

すき



鍛冶

糸くぬき

うらがれと床

あつ〜んは大事

あまの

なま



二番

おろけ強のくひ道の月影のゆるよれとて我々今入ちうける
 月影も軒端のたうれ落ひつゝよとてとて我々今入ちうける
 左強れ巖とらむてゆるよれとて我々今入ちうける
 左強の落ひつゝゆるよれとて我々今入ちうける
 おつひて月をりておんかかー何左強今入ちうける
 我神のひつゝゆるよれとて我々今入ちうける
 軒つも我々今入ちうける
 左強れ巖とらむてゆるよれとて我々今入ちうける
 おつひて月をりておんかかー何左強今入ちうける

おろけ強のくひ道の月影のゆるよれとて我々今入ちうける

強左



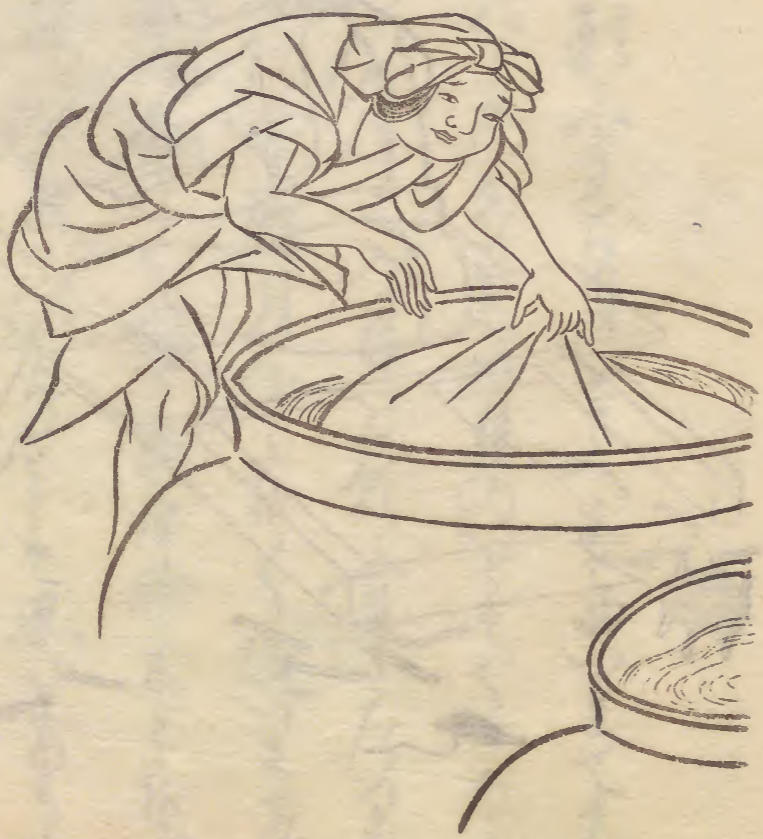
おろけ強のくひ道の月影のゆるよれとて我々今入ちうける
 おろけ強のくひ道の月影のゆるよれとて我々今入ちうける
 おろけ強のくひ道の月影のゆるよれとて我々今入ちうける
 おろけ強のくひ道の月影のゆるよれとて我々今入ちうける
 おろけ強のくひ道の月影のゆるよれとて我々今入ちうける

罽

罽はつれはつてふれそぬさて光うへふ秋の罽は月
 心もくや織る海機糸のたてあまきさくくみあ月歌
 左の我られ方気味よげしたうし其の勢を海うぶりく
 てさうと月れするると夜そりうに糸の公引ぬ地務へわ
 と海に産れもつてはささぬあまのりくのきうるさ
 織るうらう機帯は今さくしうらうけてあひささめ
 きささるとん勢を海うりうとあましく勝負あま
 さらけつてふれさみまより来た白まてうく
 かるあまのしほさういよあまかとわやへあま

紺橙

青くしうか
 紺橙をうらめ





機織

あこや

くさくさ

こま

五篇

汲みしる桶たう水よ影みすい月よとくこ曲直て乳
 ろして車いりて舟航たよのあつえは月のよとくくめらふ
 左歌月をまけつこと入月と影ふよとたわも
 すくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 とくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 産こもえれらとらめは様かしてくくくくくくくくくくくく
 我意いんもひもれあ少車ためらりよと産こきたのこもくふ
 きと作めは様かしてくくくくくくくくくくくくくくくくく
 竹ゆき心いんもくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

せりふのあつては、
はたけのつくりかた

拵物

ゆねのつくり

つくりかた

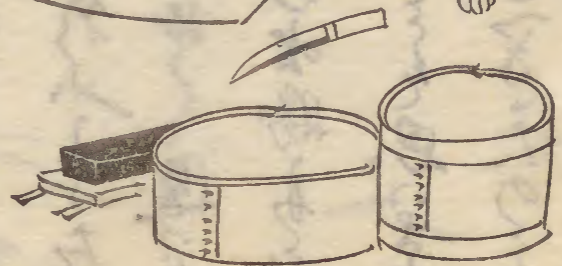
あつて

つくりかた

あつて

つくりかた

あつて

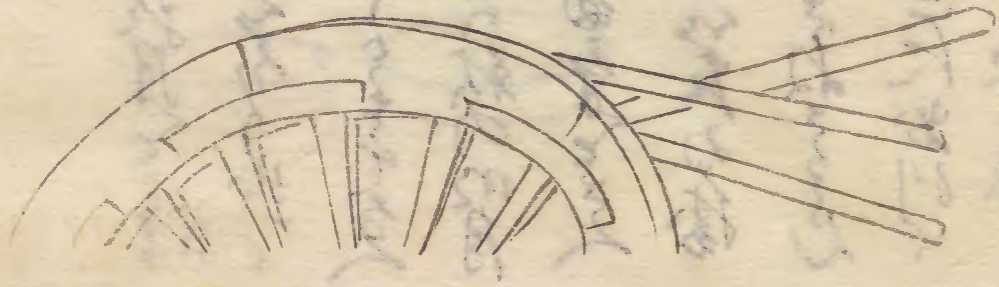


車作

あつて

つくりかた

あつて



六番

おり共の秋はしらに色播磨鍋やうひや秋月と
 あり酒は来し一かふ心く部らなむは月のおもひ出づ
 左のよふ九月てこの名月をうくまをさ
 少くははもてさうも月と喜たり右の秋の明月
 おひひく春と白ひ出るはあひはあひ
 極すくも風情をさふりあたり何れはあはれ
 うあめや散舞はるのさきと成あふあふあはれ
 我をてあひさすもては、籠子にさしあふにわら
 七歌集よ撰集をさふ入るもあはれすやわら

七歌集よ撰集をさふ入るもあはれすやわら



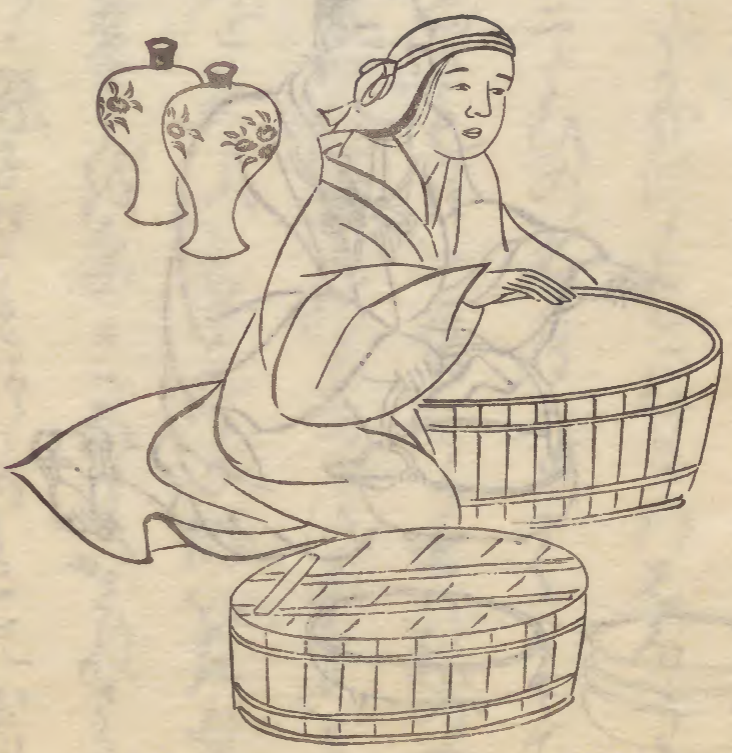
鍋賣

くり海をうりて
 かたもはくちり
 あらうあふあはれ
 くらもあはれ

先さけせよ
よやうそらう次

あまのりもく

酒作



七番

曾てた都小出る河りぬるゆあてはるるは後九月
見渡の秋の田圃のふらる昔をん物たぐれよ月
左尋言ふあてはるるあてはるるあてはるる
うゆをい右勢の秋れこのもれいなるらるまこと
おはるるとはるるゆあてはるるあてはるる
は後やすいよるゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
まかしくもはるるゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
まかしくもはるるゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
まかしくもはるるゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
まかしくもはるるゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

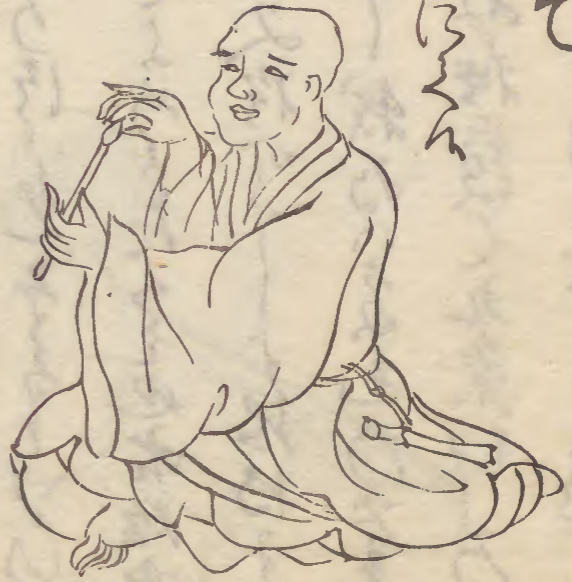
人曰くは、
 ひまは、
 舟は、
 舟りた、
 舟く、
 や右の、
 字と、
 勝と

舟りた、
 舟く、
 や右の、
 字と、
 勝と



第拾一

うねる
ものゝうねりて
みえぬ
ふ事しん



Faint background text in cursive script (sōsho).

送う地

て
か
色



Faint background text in cursive script (sōsho).

九番

秋やそは煙もたそぬ炭や記のふしす海と月と三つ所
 つき足もさも燃やすも少なきはあしとそは今か月
 左の月と観る市を深き道とて世風情も由時き歎
 あふふつひわろーたるもわ右の奇合子入かこも
 免る御らる記もぬれしも巧なるにふりてお持
 炭竈も我のいふも思ひふるもろと志ぬ意の程と
 かしたるも身此福さういおとるまれあすらるも焼引し
 七はちる歌あり右のあこたるもぬす入らるも
 の病ありとてとるも公所とて抱つるもそる務



炭竈とい
 炭をいふ
 炭をいふ

イハヒ



Faint handwritten text in cursive script, likely a commentary or description related to the illustration.

イハヒ



Faint handwritten text in cursive script, likely a commentary or description related to the illustration.



浦人

六の縄とわ

きりぎりす
たしなむ

十二番

海をの蒼りつる海をの紫の扱ひく出る山はの月
夕草になく露あつかり共めて月影とて人ほひつる哉

左右とてにおもひし海をゆりすあむ

やすむとて其の吹薪にのりしりぬほふたも人のせぬ
朔夕に君をたのむしはみまはの志しけるまをいんさうあを

せいの逸興あり者しかりそら此舞とよく
しらなりしちりむをちるるくや

木こり



十一

草刈り

草刈り
草刈り
草刈り
草刈り



十二番

秋也深き月は光も所を乏し路の上も歌の如くなる
 唯を記し初めの所は風流して雲は朽めれ月をかくる
 左様は信年のもよみあり右は雲のわたりと先
 たるくく夢ゆきとてかへ海をふりて
 いふもんをなぬ無た彼やいむれとたなふ成り
 骨を記し初めの所は思ひもほりぬ人小恙つ
 甚急よ被くらむこと本説も此よありは鳥羽の子
 むくれとて能く思ふたうや書はる理はまて夢
 ゆきとてふも字減よこはくゆりき揚へうや

えりり

と時の所

えりり

り

そのと

てん





あふらん

これぞ

扇うり

扇うり

十四番

遠山の海をくふよそへ更ふたりも同れ月のるそ凡下
 秋空の雲を眺らぬ月をけいし雲をくふよそへそらへ物か
 左寄つひりし心は海よみえはゆきと右邊無あ
 日そめはるけいしよるそへ勝
 人妻にももく衣れ細帯のそみ地はけいし娘お海
 志すもや人のそはれ行らめさうけいしそへ流す涙を
 き衣れをそ帯をつひ人ほはれそへ地をそ能き
 あちりそへ白い物の海は深つらしつらと海を
 の思そへはれけいし志そへつらと左邊にそ

おむらじ

此のひらりて
おら見えとら
いそがしや



あつたものうり
百字もあつたけも
いっつも知れ
いっつも知れ
いっつも知れ



十五番

六と浦北月もかたりの蛤の貝ひらふとてえわいともなる
 かつら蛤もえらぶといや海にひれ僕いなくぬわいし
 左平新よすりて志をも月とがめふ心直けり
 若あそひいり何言にもゆめを何とぞせんけり
 といふゆやま成す母も又いりいぬはたの橋
 他人のとりかへりぬたせり一蛤うぬるい海をも
 けやくとせ六角町のうりも真れおぬ先よりかつりては
 ち六角町やなり古歌も町と糸帯もそよれ又六
 角町あそびも真い夢のひらいていとも海もそよれた橋

蛤うし

ひろれあるいしのめ
 くらにそよれ
 といれあつたれ
 ちけのち記う那





つるやう
 あせは
 勢見つる

はるう



十七番

秋うつらぬる夜にうらふ月をひきまねてけさの白紙に書きし月
かきけりし海にふちのて照月の素よりけのわきあはな
右とまこいひはゆつとたけあまやちの洞あんじとま
くも成もまはしりまてくもあまの海月とよありま
まきりしあまのちかきまを新くもけりしあまのちか
好きりしあまのちかきまを新くもけりしあまのちか
我意のまをひのくもけりしあまのちかきまを新くも
あまの海に取らるるけりしあまのちかきまを新くも
あまの海に取らるるけりしあまのちかきまを新くも

あまの海に取らるるけりしあまのちかきまを新くも
あまの海に取らるるけりしあまのちかきまを新くも

あまの海に取らるる

あまの海に取らるる

あまの海に取らるる

あまの海に取らるる



かつらぎの

まじりけき
めすまじり
かつらぎ
やすき



十八番

うらまはなすむら餅やんちんれきふれりぬく月夜
なすむら餅やんちんれきふれりぬく月夜
左右ともはせれ事しけし可るお

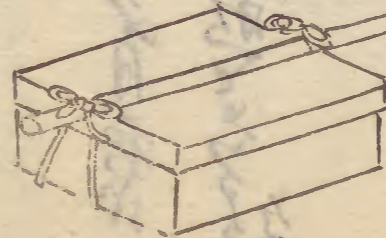
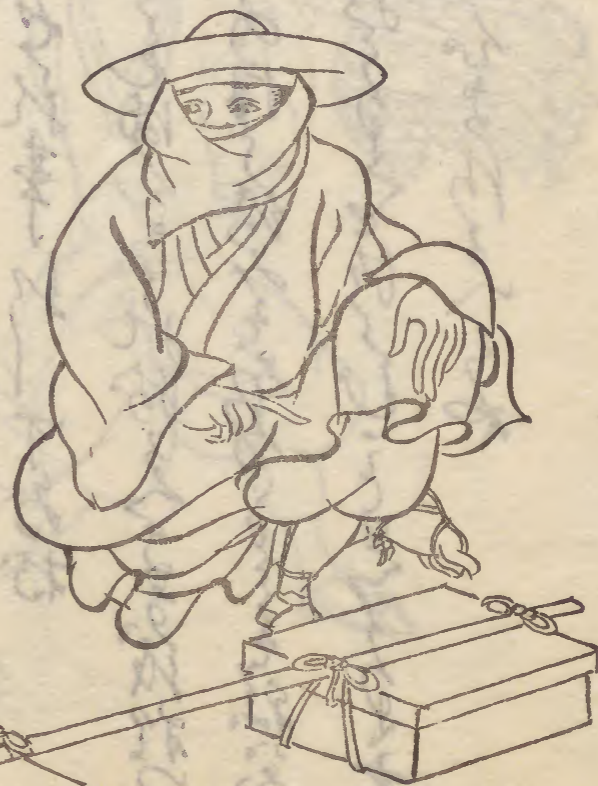
思ひしひあな悔しと海しられおろくさる成程つひに
うらまはなすむら餅やんちんれきふれりぬく月夜
さくらしてはなるはしひとさくらむら木い今
清く一葉の心をあさくむ

まじら夢

まじらにりやう

あまのこひれき

うたてあし



十八

ほうけみそ賣



まじらにりやう

あまのこひれき

うたてあし

十九番

其後一為... 我々に月...
 ...
 ...
 ...
 ...

...
 ...
 ...
 ...
 ...



あやす

あや

あや

あしらのいも
やういふもの

いふもの
らそ

いふもの



二平番

此ら此のいふ町を早にわすれてはかた月夜
嬉しむいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

あ首もいふいふいふいふいふいふいふいふ

志返しとむいふいふいふいふいふいふいふいふ
今の我をいふいふいふいふいふいふいふいふ
ききとむいふいふいふいふいふいふいふいふ
あしらのいもいふいふいふいふいふいふいふ

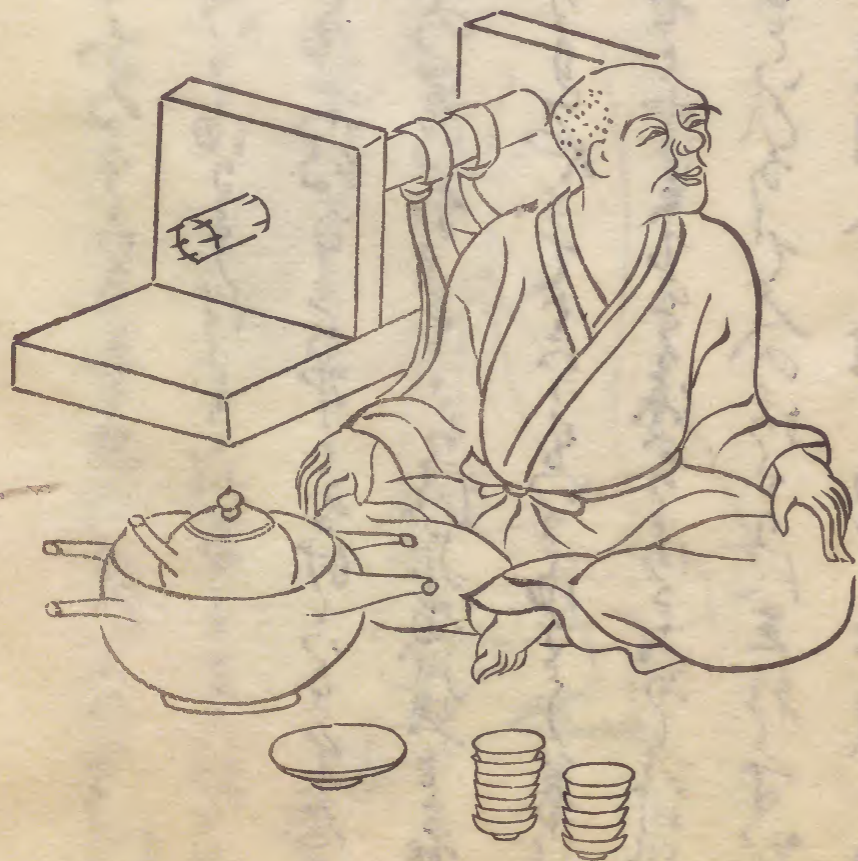
とろひやうく

とろくーれおの
かーらつろりそ



とろりー

あーそそそ
いーれのもの
そそそたる
いーそそ





あはれい
 ちりゆ
 ちりゆ
 ちりゆ

傘張



えれあ
 うろ
 たぬ
 けき

廿三番

雪をみて是れあふはれ玉泣くはつとさるはる秋敷れ月
 云々の為やひ事この我の志はこたへある月の影を
 左のの言れ朝の巻と月よ別れもそよむ右のま
 え字様くわあはら強くたぬぶはたあはく
 人あふあふ細くやをりまをねねるうりにあはく
 ひんあはらうめくねのりの何よつてを離るる
 きまふあはらうね若きひらるるのとねじうま
 片あはらうめくさるるか

製巻屋



新造所

あつた

ちうくま

ひそ

うり

この巻

あつた

あつた

あつた

あつた



羣書類從卷第五百三上

紙一



羣書類從卷第五百三上

羣書類從卷第五百三上

のり
うす
きり
し

修理
昭和二十一年
内閣文庫

